

吉岡さんとの出会い

十河 雅典

吉岡さんに初めてお会いしたのは 2011 年の暮れでした。「あなたにソゴウさん？」そう言って吉岡さんは僕を笑顔で迎えてくれたのです。待っていてくれたのだと思うとこちらも気が緩みます。そのとき僕が吉岡さんについて知っていることは僅か二つでした。ひとつは、吉岡さんが美術教育の教員を辞して銀座にギャラリーを開廊したこと。もうひとつはパーチェット病という珍しい病気に罹患し闘病中であることです。表現者である吉岡さんの活動や作品については、失礼ながら何も知らなかったのです。それなのに僕は以後、個展・企画展・グループ展で計 17 回も吉岡さんのお世話になりました。感謝申し上げます。人との巡り合わせは今更ながら不思議なものと思います。

さて、氏のパンフレットを開くと目にとび込んでくる表現があります。1988 年の「PAIN」です。それまでの幾何学的図形から作風が突如変容しています。黒く奇怪な有機的物体が壁を這っているのです。

「あ、これは俺だ」僕は衝撃を受けました。僕もまたパーチェット病を発症していたからです。1988 年頃から吉岡さんも同じ病に苦しんでいたのだと「PAIN」が告げています。

パーチェット病は日本全国に 2 万人ほどの患者がいる自己免疫疾患です。原因は不明。従って治療法は確立されておらず一生治りません。免疫系が自分を守らず、逆に暴走して自己の体を傷つけるのです。吉岡さんの言葉を引用します。



secret memory 2017 年
84x120cm 写真に紙テープ アガーデンプルク城 (ドイツ)

「感情のおもむくままに紙の上を線が走ります。気がつくと、目をつぶって描いていることもあります。この線は、世界に対して「YES」と言っているのか、「NO」と叫んでいるのかその両方なのか、よくわかりません。」

両義的痛み、僕はそれを分かるつもりです。患者同士の特権として。しかしこの作品、表現行為としてはどうでしょう。自身の病を特権化し、自らの体内に巣喰う理不尽な力に寄り掛かり過ぎていてのではないのでしょうか。「PAIN」はシリーズ化され現在に至っています。その間、氏の制作方法は変化を続けています。原図は作者の手から離れ、制作スタッフの手に渡り、検討、解釈されたあと、画廊の壁に描かれます。原図は他者の眼で客観化され、画廊空間で社会化されているのです。再び吉岡さんに語っていただきましょう。

「作品はどこまで他人の手に任せられるのかという実験をしているような気持ちになるのですが、さまざまな過程で作品から消えていくもの、あるいはスタッフの手によって削り取られ、付け加えられていくもの、そのすべてを許容した上で作品は成り立って行くものだと思います。」

個人の怨念にも似た激情から出発した原因は、他者の手で、そして画廊空間で公的存在となっていく。表現の強度を手中にしたこの方法論を「YOSHIOKA METHOD」と名付けてみます。この方法論は世界に向かって発信され、誰でも使用可能です。「PAIN」は万人の胸に刺さる行為となります。例えばパレスチナとイスラエルを隔てる壁に描かれ、例えばベオグラードの少女の勉強部屋の扉に描かれます。「PAIN」は私達が抱える共通の財産になる…そんな夢想を僕の痛みが呼び寄せています。

ところで吉岡さんの「PAIN」は眼の錯覚により中空に紡ぎ出されたように見えますが、近づくと壁と紙テープだけの現実引きもどされます。このような構造、つまり非在の生成と生成する非在が同時にあらわれる両義的な表現、それが個人の身体的葛藤から生じつつ、なお社会化されていく。これが「YOSHIOKA METHOD」の肝なのです。

もうひとつ、吉岡さんと僕の共通体験があります。二人とも美術教育に携わっていた経歴です。

ある日学生がガチな質問をしてきました、「教育って何ですか？」僕は咄嗟に「それは待つことだよ」と言いました。この答えは残念ながら僕の経験に裏打ちされた言葉ではありません。大抵の教育論者がこう述べています。教育とは「教えること」ではなく、生徒・学生に内在する成長力が芽吹き、花開く様子を側で見守り「待つこと」であると。

僕の見るところ、吉岡さんは人が好き、特に若い人の成長を促すことを心から楽しんでいます。若い人が才能を開花させる様子を我がことのように見守っています。この「待つ力」が凄い。もしかしたら吉岡さんは根っからの教育者なのではないでしょうか。

ステップス・ギャラリーのあの狭い事務室で、吉岡さんはきょうも来訪者を待っています。

(そごうまさのり/画家)



secret memory 2017 年
壁に紙テープと写真 アガーデンプルク城 (ドイツ)

吉岡君へ

菅沼 緑

作品とはいったい何ナノだろう、とよく思うのですがすっきりと答えられた試しはありません。なにかをしなければ、なにかがあらわれて、それを見た第三者は勝手にそこからなにかを汲み取ってゆくのです。それはなにも芸術的な意図のある、なしに関わらずです。

それが、一所懸命に考えて、ふだんからの主張をなにかのかたちにしてようと、などとすると、わたしの場合、とたんに思考は停止してしまいます。というか、自分勝手に都合のいい方向へと結論を導いて、あたかも全うなこたえを見つけたふう

に思い描いて、それこそ自己満足に浸ることもままあります。しかし、それはある程度仕方ないことなのかもしれません。想像することは、あくまでも個人の営為なのですから。だけど、そういつてしまえばそれはどうでもいいことになって、身もフタもありません。

そこで芯が必要になってくることとなります。その言い方もずいぶん抽象的で、曖昧な話です。さあ、どうする。世の中には抽象と具体のふたつがあって、互いに補完しあっています。決して片一方で存在できないことになっているはず。ただ、ひとつ抜け道のようなものがある、それは経験則というふうなものです。経験はバイアスを作り、勝手な判断をつくりあげることが往々です。抽象的な操作は抽象的な結論をわりと簡単に引き出して、わりと簡単に信じ込むこととなります。でも、経験をかさねて、抽象の世界でそれを繰り返すと、いつの間にか疑似具体なかたちを得てしまうこともあるようです。

いや、それは決して具体ではないのですが、あたかも具体化しているような錯覚を感じるのだと思います。そして、さらにそれは具体的な結論のひとつとして認められてしまうことすら、よくあることです。それはそれで、ひとつのありかたとして、社会的なクッションであるのかもしれない。

でも、具体的な(断っておくけど、具象的な、ではない)作品を存在させる、作者の視線はそれほどたたくなくてはなくて、むしろ柔軟でぐにやぐにやなのかもしれない。そう、最近思いはじめたところです。

かなり抽象的な話です。

(すがぬまろく/彫刻家)